

# 「総合的な学習」における「探究」を促す学習集団の組織

—船戸咲子学級の事実から—

\* 吉 村 敏 之

On the Inquiry of Integrated Studies

YOSHIMURA Toshiyuki

## 要 旨

「総合的な学習」において「探究」できる子どもを育てるには、日々の生活と学習で、事物とのかかわり、人とのかかわりを豊かにする機会が必要である。出発点は、どの子ども自分の内面を解放して好奇心を発揮できる学習集団が組織されることである。さらに、教師が子どもと一っしょになって探究を楽しむことである。群馬県東小学校での船戸咲子の実践をふまえ、探究の基盤となる意欲を高め、学習の質を深める指導のあり方を考察する。

Key words：総合的な学習、探究、学習集団、表現、船戸咲子

## 1. 子どもと一緒に探究できる教師

「総合的な学習」において「深い学び」が実現するには、子どもが探究し続けることが不可欠である。探究に向かう意欲がわき、探究を深める工夫をする子どもが育つよう、教師は、子どもの探究の芽をどのようにとらえ、探究を進める子どもとどのようにかわればよいだろうか。

子どもの探究を促し、支え、深める教師のあり方について、船戸咲子の実践から指針を得られる。船戸は、1952年から11年間、群馬県佐波郡の島小学校において、斎藤喜博校長のもとで「授業の創造」を進めた。その後も、教科の授業はもちろん、合唱、舞踊、絵画にも力を入れ、「自分のとおりに歩む」主体的に行動する子どもの育成を目指し、実践を創り続けた。

本稿では1976・1977年度に、東<sup>あづま</sup>小学校（当時は東村、現在は伊勢崎市）で行った低学年（1・2年生）の実践と、南小学校（東小学校から分離）で1981年度に担任した6年生の学習をふまえ、探究を促す教師のあり方を考える。

子どもの探究活動への芽をとらえること、子どもが

引き付けられる探究の対象をともに追求すること、子どもの探究活動が学級全体に広がる学習集団を組織できること。この3点が教師の指導の要であることを、船戸の実践から実感できる。

## 2. 子どもの探究する力の表われた「卒論」

船戸学級の6年生は、卒業前の2月半ばから自分が探究したことを「十二歳の卒業論文」に書いた。星に関する探究活動を進める際の経過と心の動きが細やかに記された、一人の男子の「卒論」全文を示す。

天体 田中 英之

二学期のはじめころ、はじめて天体に興味を持ちはじめました。そのころはまだ、天体のことなど、ぜんぜん知りませんでした。だから、たびたび博くんの家に行って天体のことをおそわっていました。

ぼくはどんどん上達していき、冬の星の会で見せる星などは、ぼくがきめるほどにまでなりました。

でも実は、ぼくはぼくでかってにきめて、博くんは八木さんとかってにきめるというように、自由にやろ

---

\* 教職大学院

うという計画だったのです。だから、よく研究して、ひろくんたちよりもいい星雲、星団を見せようとしたのになにかのはずみで、ひみつの計画ひょうを見せてしまったのです。

博くんと八木くんは「うーんなかなかいいね」と言って、いっしょうけんめい見ていました。

「しまった、なんということをしてしまったんだ。これじゃあ今までの苦労が水のあわだ」

博くんは「英ちゃんの計画でいこう」と言いました。

だれが見てもいいと言うにきまっています。約一ヶ月がかりでたてたひょうだから。

でもぼくはへんな顔をしないで、「すごいだろうー約一ヶ月かかったんだぞ、なかなかいいだろう」と言いました。

「英ちゃんすげえなー。おいよう八木さん、このままじゃー英ちゃんが助教授になるぞー」とひろ君がいいました。

それから月日がたちいよいよ星の会をやる日がきました。

ぼくは、今日の夜はくもるとよげんしました。でもひろ君と先生は「こんなに晴れているもん、はれるよー」といいました。

だけどぼくは知っていました。地平線に雲があって、山が見えないときは、だいたいくもるということを。

夕方6時、アイ・シーの門のところにみんなが集まってうちのとなりの畑のあきちでいよいよ開始。だがだいたい8時ごろ、ぼくのよげんしたとおり、雲が出て夜空を、おおってしまいました。

でもこれからというところで雲が出てきたのは残念。

それからまた月日がたち、ぼくにとってはいいものを見た。

あれは忘れもしない1981年11月3日午前3時半、とつぜん目がさめました。

「あっそういえば」と言ってろうかに向かって走りました。

ちょうどそのとき、ろうかに望遠鏡があって、そのろうかからは、南と東の空が見えていました。ぼくは南東の明るい星にいそいで望遠鏡を向けました。

そして接眼レンズをのぞいたら「すごい、これがあこがれの土星か」ぼくが土星を見るのは6年ぶり、ぼ

くは土星を一発でいれました。自分でもすごいと思う。

つぎにオレンジ色の星を入れて接眼レンズをのぞいて見たら、火星だったけど、火星はあまりおもしろくありませんでした。

つぎに木星を見ようとしたら木星らしきものは見当たらなかったで、あきらめて、土星を見ました。はじめのうちは細長い、ダイヤモンド形の物をよこにねせたように見えたけど、目がなれてきたら、ちゃんと輪の中にまるい玉を入れたように見えました。

でも土星は明るすぎて、くわしくしらべることができませんでした。

「久しぶりに見た土星けどもういい」と言ってねようとしたら地平線ちかくに、けっこう明るい星が見えました。

その星はオレンジ色にかすんで見えました。ぼくは「まさか木星では」と思い望遠鏡を向けて接眼レンズをのぞいてみたら残念なことに、それは木星ではなくて、アークトゥルスでした。

「アークトゥルスが出ているということは、もう春の大三角が出ているということだ」

今、やっと気がつき空を見わたしました。

そしたら、アークトゥルスのほか、おとめのスピカ、しし座のデネボラがちゃんと三角をえがいていました。ぼくは「あっそうだ、ねなければ」と思い出し、ふとんに入ってねました。

つぎの朝、学校に歩いて行ったら、ふっと思い出しました。「あっしまった、M81、M82、M65、M66も見ろべきだった」と小さい声で、ぼつぼついいながら歩いていました。

後をふりむいたら、ひろ君がものすごいスピードでぐんぐんぼくにせっきんしてきました。ぼくはおもわず小さい声で「マッハをこえる日は近い」と言ったら、すでにひろ君はぼくのよこにいました。ぼくはびっくりして、おもわず心の中で「なんという速さだ、ほんとに人間か」と言っているうちに、もうぼくをぬいていました。

学校にむかってまっしぐらだ。

「よう、ひろ君、ちょっとまってくれ」

ひろ君をひきとめて、きのう見た土星の話をしました。

「木星なんてどこにもなかったよ」

「うそべーそんなことねえよ」

「木星って土星より明るいのだろー」

「そうだよ」

「じゃー木星ってどこにあるん」

「おとめと、てんびんの間にあるよ」

「なに色」

「茶色でシリウスぐらいだよ」

「へーそんなにあかるいん」

「なんでなかったんだろう」

などと話しながら学校に行きました。

何日かたち、ひろ君が

「月食の写真とるん」ときいたので

「それどういう意味」

「あれっしらねん？ 1月10日に月食があるんだで」

「へー何時ごろ」

「午前3時ごろって思ったけどなー写真とる」

「とらねー」

「どうして」

「午前3時ごろおきるんじゃめんどくさい」

「へー」

また日にちがたち「いよいよあしたは月食か」と思  
いながらねました。

1月10日1時40分目がさめた。目がぱっちりあいて  
しまったので、月食を見ることにした。いっそのこと  
写真をとることにしました。

2時30分、月の上が黒くなってきました。まだかけ  
てはいません。

3時20分、月がかけ出しました。ぼくは月食のれん  
ぞくさつえいの用意をしました。

8分おきにうつしました。月は下げんの月にはなり  
ませんでした。

月がぜんぶかけてオレンジ色に光りました。最後に  
オレンジ色の月をうつして、レリーズをきりました。

成功したと思います。そしてまたカメラをセットし  
て月がもどるまでまっていた。1時間もまってい  
ました。

「もう月食もおわりかな」と思ってカメラをかたづ  
ける用意をしていたら、妹の「英ちゃん」とよぶ声が  
した。

気のせいだ、と思うけどこわくなってきました。あ  
たりを見回したがだれもいない。心がおちついたので  
空を見たらオリオン座がしずんでいました。

春の大三角が、ちょうど天頂にきていました。月を

見たらまだもどっていません。

「もうこれで月食は終わったな」と心の中で言いま  
した。

もう、ねむくなったので、カメラをかたづけずに、  
ねようとしたら、こんどは、わけもわからない、へん  
な声がしました。気のせいだと思うけどこわい。あた  
りを見ましたがだれもいませんでした。ぼくは「気の  
せいだ」と一人ごとを言ったものの、こわくて、こわ  
くて、電気も消さずにねてしまいました。

つぎの朝、学校で、きのうの体験を話しました。

だれも信じてくれませんでした。

「まあいいや」

その日の夜、空気がすんでいて天体写真をとるのに  
は、かかせない日でした。ぼくはいそいでカメラを望  
遠鏡にセットして、シャッタースピードをBにして  
レリーズをつけ、モータードライブのスイッチをつけ、  
オリオン座大星雲をカメラの中に入れてレリーズをお  
して15分間さむい中をがまんして望遠鏡のようすを見  
ていました。15分たちレリーズをきってカメラをのぞ  
いたら、オリオン座大星雲がちゃんと入っていました。

大成功です。

こんどは望遠鏡を家の中に入れて、とうめい度のわ  
るい家の中から、しかも戸をしめたまま、星の日周運  
動をとろうと思い、ビドーハンドルを回してにせ物の  
日周運動をとろうと思いました。

「もういいだろう」と思いレリーズをきろうとした  
しゅんかん、カメラが「ガタン」と音をたてて動いて  
しまったのです。

どのように動いたかという、カメラははじめシリ  
ウスの方を向いていたのです。

だけどねじが自然とゆるんできて、カメラがかって  
に動いて家の中を向いてしまったのです。

「ああ、フィルム1枚、そんなしちゃった」

月日がたち、おとうさんに「2500円のバローレンズ  
を買って」ときいたら「よし、かってやるけどなにに  
つかうんだ」ときかれたので「接眼レンズの倍りつを  
2倍にするレンズだよ」と答えました。

おとうさんは、「じゃあいこうか」というのでぼく  
は喜んで車にのりました。

おとうさんはたばこをすいながら「で、なにがほ  
しいんだ」ときいた。ぼくは、「なーにもう忘れたん、  
バローレンズを買ってとゆったんだよ」「バローレン

ズってなんだっけ」「望遠鏡のふぞく品で接眼レンズの倍りつを2倍にするレンズだよ」「へー」

ぼくはだまって、おとうさんにまかせていたら、車はふじ写真店につきました。「あれ、おとうさんにかうつもり、ぼく大竹に行きたいんだよ」「だっておまえ、望遠レンズがほしいんだろ」「ちがうよ、ぼくがほしいのは、大竹にうっている、望遠レンズよりも安い、バローレンズ。でもおとうさん、望遠レンズでもいいんだよ」

ぼくは心の中で「なんで、ぼくとおとうさんの意見があわないのかなー、でもかえっておとうさんの意見の方がいいや」と言って車からおりて、ふじ写真店の中に入って、いきました。おとうさんが、「おい英之、なにがほしいんだっけ」「ペンタックス用の望遠レンズとおまけにストロボ」「あっそうだったっけ、なんか、このぼうずがほしいって言うんですよ」

「ああそうですか、じゃあこれなんかどうですか」店の人が望遠レンズを出して、ぼくにかしてくれました。ぼくは、店のおじさんに「もっと大きいのがいい」と言いました。

おじさんは、「これなんかどうですか」と250ミリ望遠レンズをかしてくれました。

ぼくはすぐに「これがいい」と言って、かってもらうことにしました。大きいわりに、けっこう安かったのでこれにきめました。

店のおばさんが出てきて、「ぼく、これプレゼント」といってレンズみがきの道具セットをくれました。そして、みせのおじさんも、スカイライトフィルターをくれました。

ぼくはおとうさんに、「ストロボの方も忘れちゃいないだろうね」と言ったらおじさんがストロボを出して、いろいろと親切に説明してくれました。おまけに電池も入れてくれました。

ぼくは家にかえると、「おとうさんありがとう」と言って、ぼくはおとうさんに心から感しゃしました。

その日の夜、星がきれいにでていました。外とうを消して、かってもらったばかりの望遠レンズでオリオン座大星雲を3枚とり、スバルを2枚とり、ヒヤデスを2枚とり、アンドロメダ大星雲を1枚とって外とうを消したままねることにしました。

ぼくは、心の中で「学校にもって行って、どうだ、すごいだろう」と自まんしてみせたいと思いながら、

カメラをかたづけました。

この長い文章を書いた、田中英之は作文が嫌いだった。しかし、「天体」と題した「卒論」は、船戸が「考えていること、行動したことを、まったくそのまま、書きたいだけ書いている」と評するものである。

船戸は、「いわゆるうまい文章」ではないけれど、「やりたいだけ学ぶ、わかるまで考える、という教育の原則につながる」「健康で明るく子どもらしい、そして、そのなかにあるほほえましいユーモラスな生き方、考え方に、読むたびに学ばせられる」と、英之の文章から学んでいる。巧拙よりも、言葉の生じる根にある、探究し続ける、英之の姿勢に注目し、たたえている。

船戸学級の子どもたちは、自分の思いを「日記」で表現し続け、書く力をつけた。「日記」から、船戸は子ども一人ひとりの世界を理解し、探究の芽をのばした。

### 3. 探究に心が躍る教師

#### ① 子どもの力を引き出す教材の追求

船戸は「子どもというのはどこでちからが出てくるかわからない」と、日々の事実から、子ども一人ひとりの内に蔵されている伸びて行く力を認める。

一方で、教師の支えを不可欠とみる。「人間の可能であるかぎりのちからを発揮できてくるというのは、それなりの支えと自分のちからがひとつの固まりをもってその子に押しよせていったときに出てくるもの」。「どれほどに教材と子どもと教師の三つが組みあって毎日を暮らしているか、その結果に可能性が生まれてくる」。「なんにも手を下さないでいても子どもは可能なかぎりのちからが出てくるのではないかと錯覚におちいる教師がたくさんいる」と思うから、「可能性ということばをあまり流行語に使いたくない」という。「よろこびのなかで子どもはちからを出します」という船戸は、教室での日々の生活を教材の力で「よろこび」に満ちたものにするのは、教師の責任とする。

「子どもと教師が向かい合うとき、そこにはいつもよい教材がなければならない」「よい教材を選択し、その教材に向かって子どもと教師がどう生きるか」と、特に、教材を重視する。「教材が子どものものとなって歩きはじめる道筋はたくさんある。その機会をのが

さずとらえていく力を教師はもたなければならない。子どもの要求が満たされたとき、そこにしっかり立つ姿が見えてくるのである。よい教材できりと立った子どもの姿をたくさん見たいものである。」という。

## ② 子どもとともに探究するよろこび

英之の探究する意欲と行動力は、1・2年生で担任した船戸によって育まれた。1年生の5月に、子どもたちといっしょに船戸も「探検」を楽しんだ。英之が「先生、きょうは探検にいくよ!」「小泉稲荷のむこうの林に化石が見つかったから、見に行くよ」と船戸を誘うと、「これはおもしろい」と、探検の仲間に加わった。7人の男の子が自転車で走り出す。船戸は自動車で子どもの後をついていく。学校での様子とは違う「たくましくたのしい自由な子どもたち」の姿を見た。道幅が狭くなって車で進めなくなると、子どもに導かれて歩いた。「先生、あそこ、あの木のまん中にかたまっていたところがあるでしょ、あれが化石っ」と、英之が言う。化石ではなく、桐の木で虫にくわれた跡が穴になっていたのである。しかし、子どもたちはそれほどがっかりせずに帰った。子どもの探究への熱意と行動力に直にふれ、船戸は感心する。

2年生の秋、理科の学習で、子どもたちが、各自、自分の好きな虫について探究し、発表するようにした。子どもの活動する姿に、船戸の心が動き、探究の芽をとらえる。子どもが夢中になる姿を見て、昆虫でなく節足動物であってもクモとかかわる機会をつくった。クモとかかわる子どもの熱気が学級全体に満ちている様子を、船戸は、次のように記している。

教室に大きいクモ、小さいクモとたくさんのクモが持ちこまれた。なんだか教室中が、クモだらけという感じになってしまった。おしりから糸を出して「どれくらいあるか」とためしたり、足をひっぱって取ってしまったり、二、三日、クモと一緒に遊んだ。

「先生、クモがつなわたりするんだよ」と言って、赤と黄色のしまもようの大きなジョロウグモをぶらさげているのは克ちゃんだ。たのしそうに見ていると、たちまちつなわたりをはじめた。教室中、大さわぎ、つなわたりするクモにわいわいと声援をおくる。

子どもたちは、クモと遊びながら体の構造や生態を

知った。「口のさきのところにある、とがったものであるいていました。もしかしたら、それは手かもしれない」「口のところにあるくところがあった。なんでそのところがあるくのかふしぎなくらいだった」「口のところにあるとがったもののさきのところだけに毛がはえていました」と、頭の先にある触覚に興味を持つ。触覚の先の毛の生えている部分まで子どもの目に入り、観察した。

数日後の朝、英之が「先生、いいことわかったよ」と声を弾ませ、とんできた。前の晩のテレビ番組でのクモについて心に残った内容を語り始めた。「あのね、クモはうしろの足で糸をひっぱるんだよ。そして、その糸には小さい真珠の玉のようなものがついていて、それが、ねばねばして、えものをとるんだって」と。黒板に絵も描いた。英之の発表をきくと、子どもたちは、細い糸が小さい真珠のような玉をつけていることが不思議でならなかった。クモが、子どもの心をすっかりとらえてしまったのである。

子どもの思いが伝わった。船戸もクモに対して好奇心が湧き、家に帰ってから『ファール昆虫記』のクモ編を読まずにはいられなくなった。「きょうの英之の話したことがきつとあるにちがいない、あすはそのことを明確にわからせたい、自分がわかりたい、という気持ちでいっぱいになってしまった」。自分の息子のために買った昆虫記[中村浩記『少年少女ファール昆虫記 第6巻 くもの生活』あかね書房 1963年]を読み出したらおもしろくてやめられなくなってしまった。夜12時近くなって、英之の話した部分が見つかった。学級の子どものにも伝えたくなり、「とてもうれしくて、あすが待ちどおしい思いでその夜をすごした」。

翌日、教室で、船戸は子どもたちに昆虫記を読み聞かせた。子どもたちも気の済むまでクモの話をした。その次の日、「先生、クモはなんで赤や黄色のきれいな色をしてると思う?」と、さらに新しい話題が、英之から出てきた。「どうしてだろうねえ」と船戸がたずねると、「あのね、青い空に赤と黄色のもようは、はっきり見えるだろう。色をおとりにつかっているんだよ。ちょうちょうが花だと思ってよってくるからね。」と答えた。英之の話について船戸が友人に電話をすると、「攻撃的保護色」だと教えてくれた。新たな知識を得たよろこびを子どもと分かち合いたくなり、「またま



た、あすが待ちどおしい夜となった」。

クモを探究する日は一週間も続いた。子どもの発見から昆虫記を読み出した船戸は、読むたびに子どもたちに話した。子どもたちは、その話から、また次々と問題を出してきた。クモの綱渡りから始まった学習が専門的なクモの生態にまで深められた。「子どもの探究心は、深く、かぎりがない」と感心した。

クモは、生物の分類上は、昆虫ではなく節足動物である。しかし、ファーブルは昆虫記で取り上げ、しかも「ひじょうにおもしろい部分」とされている(中村浩による)。教科書の内容にとらわれない探究活動が、科学の本質にふれる経験につながった。

「ひじょうに感覚的なものからはっていく子どもたちが、ただ自分の興味本位ではなくて、ものごとが科学的に解明されていくみちすじを覚えていくのです。それは受け持ちの私を触発してくれます。私が眠れぬ夜を過ごしてあしたが待ちどおしいと思うのは、ひじょうにうれしい教師の姿ではないでしょうか。」と、子どもとともに探究する教師のよろこびを、クモの学習の事実を通して船戸は実感する。子どもと教師は「学習のよろこびのなかに同居している」という。子どもといっしょに進める探究は「教師にだけしか味わえないよろこび」とする。

船戸は、「ひとつのことに夢中になって熱中する、そのことがほかをもよくしていく力になる」と、「40年近い教師生活のなかでいつも子どもから学んできた」。2年生でクモに夢中になった英之は、6年生になると天体観測に打ち込む。

#### 4. 一人の探究を共有できる学級を組織する

船戸学級の子どもたちが天体を探究する契機となったのは小川博である。博は5年生の時から星に興味を持っていた。6年生になると星の探究を深める様子が、日記からうかがえる。本を読んで天体望遠鏡の難しい扱い方を理解し、20日後には自分の見たい星をとらえられるまでになった。写真も撮れるようになった。強い関心により、探究の方法を習得したのである。

5月7日(月)

天体ガイドブックを読んでいるとちゅう、いいことがのっていた。

くらい星のさがし方でとくに星雲、星団、小宇宙のみつめかたである。例にM57がのっていた。そこをじっくり読んでやっとわかった。やり方はベガを入れ18時36分に赤経をまわし、こんどは18時56分33度になるまで望遠鏡をうごかす、接眼レンズをのぞくとある、とかいてある。

このやり方で自信がついたら、晴れた夜やって見ようと思う。

5月26日(火)

月曜日の夜、星がたくさん出ていた。ふつうは望遠鏡を出すけれど、8時から9時まではカメラで星の写真をとった。フィルムがのこり6枚で自分の好きな星をとった。

シャッターをあけておく時間を10秒で、木星、土星、スピカ、アークツールス、北斗七星、ベガ、北の日周運動を写した。

9時から10時まで望遠鏡で星を見るわけだが9時15分までしか見なかった。そのわけは見るものは見たからだ。これ以上見てもしかたがないと思った。

児童会長の博は、7月7日の「たなばた集会」で、全校の子どもたちに星の話をした。教室に戻り、話すのを忘れた木星について、学級の子どもたちに語った。星への思いが強まった博は、8月8日に観測会を開いた。学級全体に星への関心が広まり、夏休み明けには、教室の天井に星の図が貼られた。

好奇心の強い英之も宇宙に関心を示すようになる。その様子が詩に表れた。

宇宙の穴

宇宙の穴はブラックホールとちがって  
べつのものである

ぼくは前からそれが見たかった  
見たくて 見たくてしょうがなかった  
ある日

NHK600こちら情報部を見ていた

「宇宙の穴とは はてしなく  
星もなにもないことである」と言った

ぼくはガクッときた  
なにもないところを見てもしかたがない  
ぼくの思っていた宇宙の穴は

そんなもんじゃない  
くらいところにうずがあり  
星をすいこんでいるところが見られる  
ぼくはそう信じていた  
ところがどっこい  
それは空想にすぎなかった  
宇宙の穴は小ぐま座ふきんにある  
ぼくは ただなにもないだけなんて  
想像もつかなかった  
くらいところにうずがあり  
星をすいこんでいるのと  
ただなにもないだけとは大ちがい  
ぼくはほんとにガクッときた

宇宙の穴への空想は、他の子たちにも広がった。休み時間には、英之のまわりに集まって天体の本を広げ、想像の図を描いた。英之は、自分の予想がはずれて意欲を失うどころか、天体観測への熱をあげた。家で天体を観測して、自分で星のスライドを作った。それを学級の仲間に見せたいという要求を船戸が認め、機会を設けた。その様子を、竹沢康子が10月26日の日記に書いている。英之の努力の成果に感心し、自分の力では不可能な星の世界への接近によろこんでいる。

学校で星を見ました。それは4時間目に視聴覚室で田中君と小川君が星のスライドを見せてくれたからです。私は学校で星が見られるとは思わなかったし、それに田中君が自分でとった星を見せてくれるのです。田中君の他にだれもっていない特別なスライドで、私は「本日初公開かな」と思いながら視聴覚室へ行きました。

かに星雲 ドーナツ星雲 バラ星雲 北アメリカ星雲 馬頭星雲

数えきれないほど、覚えきれないほど次々とスライドが回っていきます。ちゃんと説明もはいつているのです。

かに星雲を見て私は魚に見えました。でも先生は「えびがにに見えるんね」といいました。私は、先生と考えがちがうなと思いながらそのかに星雲のスライドをえびがにに見立ててよく見てみました。しっぽのところは魚のしっぽにも、えびがにのしっぽにも見えるので紀子ちゃんに「魚に見えない」と聞くと、紀子

ちゃんは「見える見える、あそこにしっぽがあって、あそこが目」といっているうちに次のスライドがでてきました。見たこともないのがよく出てきます。星のフィルムをどんどん見ていきました。

ほんとにたくさんあるので、よくとったなと感心してしまいます。

秋の星の観測会のとき見たリング星雲。あのぼけていたのがとてもきれいに見えました。よかったのは馬頭星雲でした。私は、まえ田中君が黒板にかいてくれたときから見たいと思っていたのが今日見られたのです。ちゃんと、黒い色の馬のあたまの形になっているのです。

今日は学校で星が見られたし、見たこともない星雲が見られてよかった。

学級全体に広がった天体の探究に対して、小林利充も熱心に取り組んだ。6年生で船戸に担任されるまでは学習も生活も消極的な姿勢だった子である。国語の「表現を的確に」の学習の後には、冬の観測会にむけて、星に対する興味を示す詩を作った。

星  
昨日の夜  
星を見に庭に出た  
あいにく天頂のところに雲がかかっていた  
「今日は 天体望遠鏡を出すのは  
よしにしよう」  
ぼくは  
雲がどくのを待っていた  
よるの空気はつめたい  
おまけに風までふいていた  
ぼくは げん関に入って  
もう一度空に向かってふりむいた  
フォーマルハウトが青くかすんで見えた  
フォーマルハウトとは  
南の魚座のアルファ星  
いったんねて一時ごろおきて見た  
月がでていたが  
スバルはかがやいて見えていた  
秋のスバルと今のスバルは  
位置がかわって見える  
一ヶ月が二時間の変化を生む

「やはり星のせいかいはしんぴを招く」  
ぼくはこう思ってまたねた

付記：本稿は、科学研究費助成金（課題番号 19K02445）  
による研究成果の一部を示すものである。

利充が天体に関心を持ったのは、英之の影響である。博に刺激を受けた英之の興味が、利充にも伝わった。一人の探究が他の子たちに広がったのである。

（令和元年 9 月 27 日 受理）

英之は、12月28日夕方 5 時から観測会を開いた。星の探究が学級全体の文化として根づいたのである。

## 5. 自分の内面を表現できる子どもの育成

5 月に表れた博の天体への関心が、7 月には学級全体へと広がっている。船戸学級の子どもたちが学級全体で星の探究へと向かった原動力は、何だろうか。

自分の内面を表現できる子どもが育ち、お互いの内面の世界を認め合えたことが大きい。どの子も自分の内面を表現できるのは、言葉、行動、表情の奥にある、かすかな心の動きを、船戸が「自然」な「居方」で受けとめるからである。さらに、一人ひとりの内に潜む伸びる芽を船戸が適切な機会にとらえ、自分の探究したいことを心ゆくまで歩める道へと方向づける。

心が解放された子どもは、教材の力によって伸びていく。船戸自身が心躍らせて探究することにより、子どもたちは教材の魅力にいつそう引きつけられる。子どもも教師も学ぶよろこびをともに味わう仲間として、未知の新しい世界に出会う。学級が心引かれる対象にむかって探究する学習集団となる。

「総合的な学習」での「探究」の源泉は、学習の道筋をとらえる感性、教材を深く追求する知性を備えた教師が、子どもとともに探究を楽しむ経験にある。子どもも教師もいっしょに探究する活動の積み重ねにより、探究を促す学習集団として学級が組織される。かつて船戸学級の子どもたちが取り組み続けた、星の探究は、これからの総合的な学習を創る指針となる。船戸学級の事実が、時代を超えて、教育の真実を示す。

※本文中の教師名と児童名は敬称略とした。

## 参考文献

- 船戸咲子『子どもの海』一ツ橋書房 1983年  
船戸咲子『子どもの話』一ツ橋書房 1991年  
『十二歳の卒業論文』2013年